

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 21 日現在

機関番号：53203

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26884077

研究課題名(和文) 指示表現による相互理解の達成の解明：技能教授場面の分析から

研究課題名(英文) Referential Expressions in Mutual Understanding in Teacher-Student Interaction

研究代表者

小川 典子 (OGAWA, Noriko)

富山高等専門学校・一般教養科・助教

研究者番号：20734388

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、場所に言及する際に用いられる指示表現がやりとりの中でどのように選択され、そして理解されるのか明らかにするため、茶道稽古場面と自動車教習所の教習場面を録画・録音し、場所表現の収集を行った。この2種類のデータを空間参照枠の観点から比較したとき、前者は相対参照枠、後者は絶対参照枠が多く用いられる傾向が明らかとなった。この傾向の違いは、2種類のデータにおける参加者の位置関係の違いというよりも、位置づけられる対象や場所のバラエティーの豊富さが関わっていると考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study investigates referential expressions which are used to refer places in interaction. In order to unveil how they are chosen among many expressions and understood by the participants, two types of data, lessons of tea ceremony and driving school, were video-taped. In terms of frames of reference, more expressions based on relative frame of reference were used in the former data and more expressions based on absolute frame of reference were used in the latter data. The difference in tendency is considered to arise from the difference in the range of variety of objects and places that are positioned by each referential expression rather than the positional difference of participants.

研究分野：言語学

キーワード：空間参照枠 教授場面 指示 相互行為

1. 研究開始当初の背景

本研究で主な分析対象とする指示表現（特に「これ/それ/あれ」this, that等の指示詞）はあらゆる言語に存在するとされ、これまで国内・国外ともに多くの研究の積み重ねがあり、人間の認知と他者との接点が交差する表現として、古くから研究者の興味を惹きつけてきた。これらの研究は、「文章および会話における指示詞の使われ方を統一的に説明する」という目的を持った意味論・語用論的アプローチしてまとめることができる。

さらに指示詞は指示（reference）という行為において選択可能なひとつの表現としてより大きな観点から位置づけることも可能である。このような立場から指示表現一般に対して研究を行っている研究として、社会学を背景とする「会話分析（Conversation Analysis）」(Sacks et al. 1974)のアプローチがある。このアプローチにおいては、Sacks & Schegloff (1979)を端緒として、会話における指示の行為は話し手単独で行われるものではなく、話し手と聞き手の共同作業によって達成されるものという観点から研究が行われており、林(2005等)の一連の研究、須賀(2006, 2007等)の一連の研究、Enfield & Stivers eds. (2007)、Oh(2007)、串田(2008)等、近年盛んに議論されている。ある程度「理想化された言語」を分析対象とし、話し手中心の文法記述を行っていた従来の研究とは異なり、相互行為言語学が採用する会話分析の手法においては、実際の話し言葉のデータを、言語的要素だけでなく音声的特徴や身体動作といった非言語的要素も含めて総合的かつ緻密に分析し、話し手と聞き手の相互行為における文法を明らかにしようとしている点が特徴である。

人と人が実際にやりとりする際、指示の行為は常に成功する（＝相手が指示対象を理解する）とは限らない。本研究では、実際に指示の行為が行われている場面を指示の失敗場面も含めて詳細に観察することを通して、人と人が織りなす繊細な相互理解の一端を明らかにする。

2. 研究の目的

本研究の目的は、場所に言及する際に用いられる指示表現が、人と人とのやりとりの中でどのように選択され、そして理解されるのかを、茶道稽古場面と自動車教習所教習場面の録画・録音データを用い、会話分析の手法により解明することである。話し手がどのような形式の指示表現を選択したかということには、話し手が聞き手の知識状態・知覚状態をどのように予測したのかが反映される。そのような指示表現を分析することにより、発話や振る舞いといった、聞き手が発する様々な言語的要素・非言語的要素に対して、話し手がいかに敏感に反応し、指示対象の理解も含めた相互理解が達成されるさまを明らかにする。

3. 研究の方法

本研究では、指示表現が多用されると予測される技能教授場面に注目する。具体的には、茶道稽古場面および自動車教習場面のビデオ撮影を行い、データとして用いる。

収録したデータから指示表現を収集するとともに、会話分析の手法を用いて緻密な書き起こしを行い、やりとりを分析する。

さらに、茶道稽古場面、技能教習場面のデータに関して得られた知見を比較し、観察可能な聞き手の行動および話し手の指示表現選択という観点から、相互行為を記述する。

具体的な研究内容と方法は以下の通りである。

研究課題1：茶道稽古場面における指示表現

本研究課題では茶道稽古場面を録画・録音し、そこで生じている指示の行為を記述・分析する。より具体的には、指導者、生徒を含む稽古参加者の位置関係や、それまでのやりとりの流れにおいて、どのような指示表現が選択されているのかだけでなく、指示表現の理解に問題が起こった場合（稽古場面では指導者と生徒が異なる方向を向いて座るため、理解の齟齬はしばしば起こる）、いかに修復されるのかを詳細に観察・記述することによって明らかにする。

また、茶道稽古場面は日常の会話が行われつつも、茶道の稽古という特定の目的のもとに行われる「制度的場面」(Mehan 1979; Atkinson & Drew 1979等)の相互行為である。このような制度的場面と非制度的場面が混在する場面の分析を通して、両場面がいかに移り変わっているのか（そしてその移り変わりはどのような要素から判断できるのか）についても明らかにする。

研究課題2：自動車教習場面における指示表現

本研究課題では、自動車教習所における技能教習場面を録画・録音し、そこで生じている指示の行為を記述・分析する。

実車を用いた技能教習（特に路上教習）では、指導員と教習生との相互理解の達成が極めて重要な意味を持つ。なぜなら、相互理解の達成あるいは失敗が、運転技術教授の達成・不達成につながるだけでなく、交通事故につながり得るといった危険性を併せ持つためである。同時に、教習所内での技能教習と異なり、路上教習においては車を停車させての指導が困難であるため、指示の問題（認識の問題）の解消よりも発話の進行性（progressivity）が優先される可能性もある。

本研究課題では、指導員が年齢も背景もさまざまに異なる教習生に対して、どのような指示表現を選択し、そしてどのようなタイミングで発話しているのかに加えて、「認識と進行性のやりくり」(串田 2008)がいかになされているのかを明らかにする。

研究課題3：2つのデータの比較

研究課題 1、2 はどちらも制度的場面であるが、教習場面は時間的制約や緊張度、国から公務を一部委託されている公的性等という点において、茶道稽古場面と大きく異なる。加えて、両場面ともに技術・技能の教授場面であるが、教授という行為の進行を自由に止められるか否かにおいて異なっている。このような制度的、技術・技能の教授場面という共通性を持ちつつも、異なった性質を持つ 2 つのデータを比較することにより、当該の制度的場面やその場の参加者の知識・知覚状態に合った指示表現を、話し手がいかに選択しているのかを明らかにする。

4. 研究成果

平成 26 年度は茶道稽古場面および自動車教習場面のビデオ撮影を行い、収集したデータの書き起こしを進めた。

茶道稽古場面と自動車教習場面はどちらも先生—生徒間における技能教授を含んでいるが、指示表現により位置づける対象や場所の多様性や教授という行為の進行を自由に止められるか否かにおいて大きく異なっている。

このような性質の異なる 2 つのデータから収集した指示表現を比較した際、それぞれのデータで使用される指示表現に基づく「空間参照枠」(Levinson 1996) に異なる傾向が見られた。茶道稽古場面で用いられる指示表現の多くが「相対参照枠」(relative frame of reference) に基づくのに対し、自動車教習場面で用いられる指示表現の多くは「絶対参照枠」(absolute frame of reference) に基づいていた。この傾向の違いは、2 つの教授場面において、指示表現によって位置づけられる対象や場所のバラエティーの豊富さが関わっていると考えられる。

参照枠の選択には様々な要因が働くことが指摘されているが、位置の描写か移動の描写かといった空間指示の種類が関与する要因についてはまだあまり分析が進んでいない(cf. 松本ほか 2010)。本研究で得られたデータはこの要因を明らかにするのに有効であると思われるため、空間参照枠の観点からの分析をさらに推し進めていく必要があることが明らかとなった。

(なお、研究代表者の不測の病気により、平成 27 年度 6 月から 2 月頃まで研究の中断を余儀なくされたため、データ収集、書き起こし、分析、研究成果の取りまとめ、研究成果の発表等、当該年度に実施を予定していた内容の多くを遂行することが困難となったため、上述の研究成果は平成 26 年度のものととなっている。)

< 引用文献 >

Atkinson, J.M. & P. Drew (1979) *Order in Court: The Organisation of Verbal Interaction in Judicial Settings*. London: Macmillan.

Enfield, N.J. and Tanya Stivers (eds.) (2007) *Person Reference in Interaction: Linguistic, Cultural, and Social Perspectives*. Cambridge: Cambridge University Press.

林誠 (2005) 「「文」内におけるインタラクティブアクション」、串田秀也・定延利之・伝康晴(編)『活動としての文と発話』、ひつじ書房, pp.1-26.

串田秀也 (2008) 「指示者が開始する認識探索：認識と進行性のやりくり」、『社会言語科学』, Vol. 10(2), pp.96-108.

Levinson, Stephen C. (1996) “Frames of reference and Molyneux’s question: crosslinguistic evidence.” In P. Bloom et al. (eds.) *Language and space*, pp.109-169. Cambridge: MIT Press.

松本曜・原佐英子・夏池大介 (2010) 「地形的環境と空間参照枠の使用：神戸における調査から」、KLS 30, pp. 13-24.

Mehan, H. (1979) *Learning Lessons: Social Organization in the Classroom*. Cambridge, Mass., Harvard University Press.

Oh, Sun-Young (2007) “The interactional meanings of quasi-pronouns in Korean conversation.” In Enfield, N. J. & Stivers, T. (eds.) *Person reference in interaction*, pp. 203-225. Cambridge: Cambridge University Press.

Sacks, Harvey and Emanuel A. Schegloff (1979) “Two Preferences in the Organization of Reference to Persons in Conversation and Their Interaction.” In G. Psathas (ed.) *Everyday Language*, pp.15-21. New York: Irvington.

Sacks, Harvey, Emanuel A. Schegloff, and Gail Jefferson (1974) “A Simplest Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation.” *Language*, 50: 696-735.

須賀あゆみ (2006) 「相互行為としての指示：日本語の会話における指示対象の認識を確立するプラクティス」、『奈良女子大学文学部研究教育年報』, Vol.3, pp.63-73.

須賀あゆみ (2007) 「指示交渉と「あれ」の相互行為上の機能」、『英語と文法と：鈴木英一教授還暦記念論文集』, 開拓社, pp.157-169.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔図書〕(計 1 件)

小川典子・野澤元「指示詞の認知的基盤と選択原理」、山梨正明(他編)『認知言語学論考 No. 12』, ひつじ書房, pp. 115-166, 2015 年.

6 . 研究組織

(1)研究代表者

小川 典子 (OGAWA, Noriko)

富山高等専門学校・一般教養科・助教

研究者番号：20734388